

活仏の世俗的訓話とその役割

—ホボクサイル・モンゴル社会における シャリワン・ゲゲン十四世の事例に注目して—

ナムジャウ

総合研究大学院大学 文化科学研究科 地域文化学専攻

本稿は多民族・多宗教を有する新疆の地において、少数派のホボクサイル・モンゴルが信仰するチベット仏教がいかに成り立っているかを考察することを目的とする。特にシャリワン・ゲゲン十四世に焦点をあて、シャリワン・ゲゲンの出身地であるホボクサイル・モンゴル社会におけるシャリワン・ゲゲン十四世の役割について、日常生活をめぐる訓話と医療・災害をめぐる訓話といった事例を通して分析した。

ホボクサイル・モンゴルでは非日常的な状況、あるいは極端な状況にあるとき、シャリワン・ゲゲンを必要とし、他方ゲゲンもそうした信者の信仰によって存立しえる。ゲゲンは人々の社会生活や心に寄り沿った助言に努め、それが両者の関係をより近密なものへと結びつけている。こうしてシャリワン・ゲゲン十四世はホボクサイル・モンゴルの信仰を代表する明示的なシンボルとなっている。シャリワン・ゲゲン十四世の存在、活動、社会に果たす役割を明らかにすることは、ホボクサイル・モンゴルの信仰と宗教生活を明らかにするに留まらず、中国の宗教政策の中核部分の一端を明らかにするとともに、多宗教状況における少数派宗教の在り方という世界的に共通する問題を考える上でも重要であると考えられる。

キーワード：ホボクサイル・モンゴル、シャリワン・ゲゲン、活仏

- はじめに
- ホボクサイル地域の概要
 - 2.1 地理的位置と地勢
 - 2.2 居住する諸民族と民族間関係
- ホボクサイル・モンゴル社会における仏教
 - 3.1 仏教信仰の歴史
 - 3.2 活仏制度の歴史とシャリワン・ゲゲン制度の由来
- シャリワン・ゲゲン十四世の訓話と影響
 - 4.1 日常生活をめぐる世俗的訓話
 - 4.2 病気・災害をめぐる訓話
- おわりに

1. はじめに

中国新疆ウイグル自治区（以下は新疆と略す）は多民族・多宗教を有する地域である。新疆に居住する数多くの異なる起源、歴史、宗教、言語、文字、芸能を持つ民族は、相互に密接に影響し合ってきた。本来この地域はイスラム教徒が多い地域だった。しかし、1990年代に入ると、特に漢民族の文化の影響が急速に浸透してきた。例えば、漢語の学習の隆盛、漢族学校へ通学する生徒の増加、漢民族との通婚の増加など様々な現象が見られる。そのような地域に現在、チベット仏教を信仰する20万近くのモンゴルが生活している。しかし、これらチベット仏教徒であるモンゴルの宗教信仰がいかに成り立っているかという問題は、これまであまり注目されてこなかった。

新疆にはバヤンゴル（巴音郭楞）モンゴル自治州、ボルタル（博爾塔拉）モンゴル自治州とホボクサイル（和布克賽爾）モンゴル自治県という三つのモンゴル自治地域がある。ホボクサイルに生活するモンゴルのすべては、オイラド系エスニック集団である。彼らは17世紀初期、「四オイラド」として知られた中央ユーラシアの有力な遊牧集団連合の後裔たちである。したがって、現在のモンゴル国におけるモンゴル系諸部や中国内モンゴルにおけるモンゴル系諸部と異なる祖先を持っている。当時の「四オイラド」連合¹⁾が牧地不足や内部抗争によって崩壊した際、その一成員であるトルグド部は領主のホ・オルログに率いられ、ロシアのイジル河畔へ移住し、もう一部分のホシュド部はグーシ・ハーンの指導のもとに青海へ移住した。その後「最後の遊牧帝国」ジュンガル帝国²⁾が故地に建国された。だが、18世紀前半に、東から台頭してきた満洲の勢力が徐々にモンゴル各部を征服し、ジュンガルとも百年近く戦争を行った。長期の戦争の結果、ジュンガルは敗れ、人口が大幅に減少した。この情報がロシアの地へ伝わり、トルグド部は故郷に向って再移住することになっ

た。彼らは多くの犠牲を払って1771年にジュンガルの故地についた³⁾。当時の清朝政府は彼らを盟旗制度に編入し、その内の一盟をホボクサイルに置いた。現在ホボクサイルに生活するモンゴルは、このロシアから東帰したトルグド部の後裔であり、転生活仏であるシャリワン・ゲゲンを信仰している。

1990年代以降の動向をみると、シャリワン・ゲゲンの信者は出身地のホボクサイルだけに留まらず、全新疆のモンゴル世界やロシア連邦のカムイク共和国に生活するモンゴル世界にまで広がっている。しかし、このようなオイラド・モンゴル世界に強い影響力があるシャリワン・ゲゲンに関する研究は少なく、現地研究者のウ・エルデニ（2004）、バ・バトバヤル（2011）のみの研究がある。しかも、そこではシャリワン・ゲゲンの一世から十四世までの転生過程と活躍していた寺院を紹介する程度に留まっている。チベット仏教世界において、転生活仏たちは多くの場合、政治的にも高い位置について活躍していた。ダライ・ラマのチベットにおける政教政権はよく知られている。政教政権の制度は清朝乾隆帝の時代になると安定し、清朝中央政府の統治のもと、ダライ・ラマやパンチェン・ラマにチベットの宗教信仰だけではなく、行政の権力も与えていた（弘学 1997: 110-117）。清朝の時代、政教政権あるいは活仏の政治参与制度はモンゴル地区にもみられた。当時、ハルハ・モンゴル（現在のモンゴル国）にジェブツンダンバ・ホトクト、内モンゴルにジャンジャ・ホトクトという活仏がいたが彼らの政治的な影響力は大きかった。特に、ジェブツンダンバ・ホトクトはモンゴル人民共和国最初の国家元首でもあった。このように、チベット仏教世界において、活仏とは単に仏教界にのみ活動するものではなかった。

上述のような大活仏らが活躍していたチベット仏教世界は、今日では共産主義中国の領土になっている。中国政府は仏教協会を設立し、仏

教徒を管理しようとしているが、そこにはあくまで大活仏らを政治的に利用しようとする意図がみてとれる。ところで、現在は、政治とのかかわりからジャンジャ・ホトクトは欠位、ダライ・ラマ十四世は亡命、パンチェン・ラマ十世は円寂⁴⁾、阿嘉・洛桑圖旦七世⁵⁾は亡命しているという状況にある。このような現状のもと、現在でもホボクサイルを中心に影響力を持つシャリワン・ゲゲン十四世は中国政府にとって、重要な意味を持っていると思われる。

本稿は多民族・多宗教を有する新疆の地において、少数派のホボクサイル・モンゴルが信仰するチベット仏教がいかに成り立っているかを考察することを目的とする。特にシャリワン・ゲゲン十四世に焦点をあて、シャリワン・ゲゲンの出身地であるホボクサイル・モンゴル社会におけるシャリワン・ゲゲン十四世の役割やシャリワン・ゲゲン十四世の言動をいくつかの事例を通して分析する。彼の存在、活動、社会に果たす役割を明らかにすることは、ホボクサイル・モンゴルの信仰と宗教生活を明らかにするに留まらず、中国の宗教政策の中核部分の一端を明らかにするとともに、多宗教状況における少数派宗教の在り方という世界的に共通する問題を考える上でも重要であると考えられる。

2. ホボクサイル地域の概要

2.1 地理的位置と地勢

ホボクサイルという言葉の意味については様々な説がある。たとえば、元はho buyu yin sair「ホ・ボグ（鹿）・イン（の）・サイル（臀部）」という言葉であったという説がある。現在のホボクサイルの西北部にサイル山脈があるが、北部からみると、鹿の臀部のように見えるためそのように称したとされる。また別の説では昔、サイル山脈には多くの鹿（ホ・ボグ）が生活しており、当時の人々はこれをもって、当該地域全体を「ホ・ボグ・イン・サイル」と総称し、後に時を経て「ホボクサイル」に変遷したという

（ウ・エルデニ 2004: 97-100）。現在のホボクサイルには、「ホ・ボグ（鹿）・ギン（の）・ゴル（河）」、「ナリン（細い）・ホ・ボグ（鹿）」等、「ホ・ボグ」を起源とする地名がたくさんあるため、この説は確かに有力なものであろう。

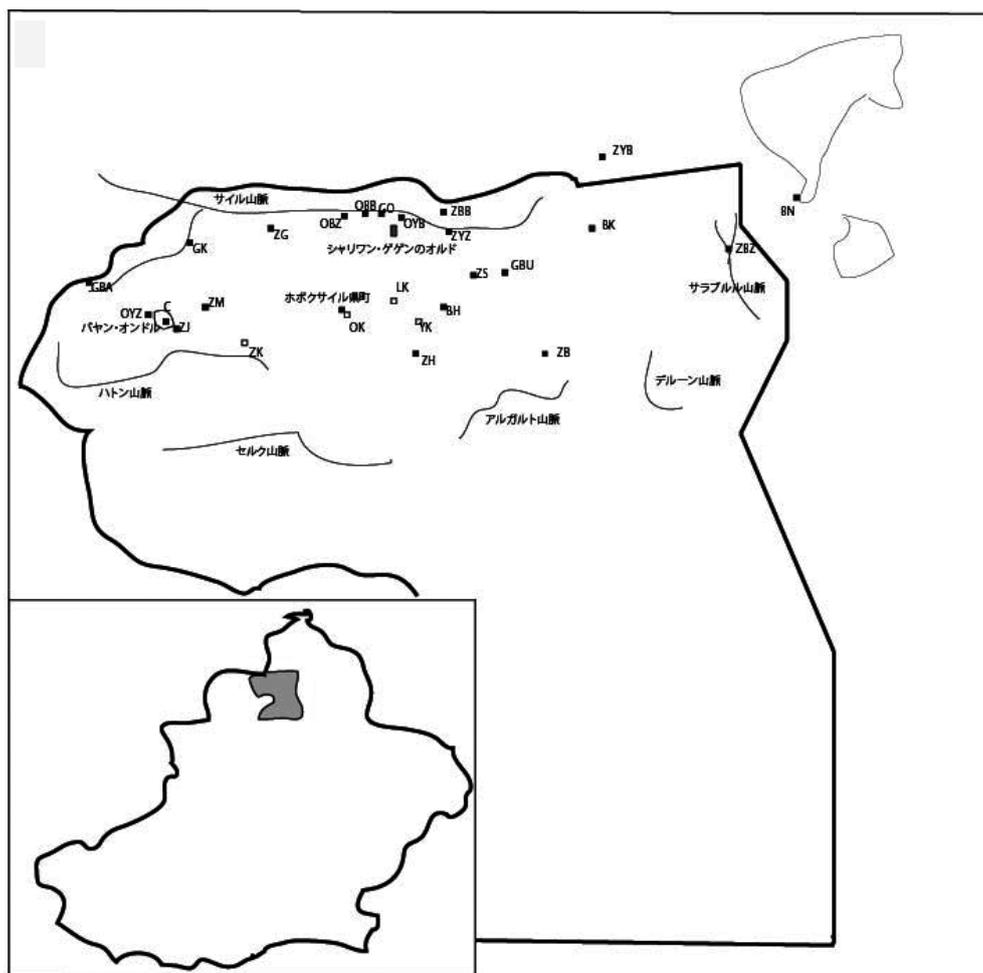
今日のホボクサイル・モンゴル自治県は新疆ウイグル自治区北部に位置し（図1）、北西にカザフスタン共和国、北にジムナイ（吉木乃）県、東にブールルトハイ（福海）県、南に昌吉回族自治州の昌吉市、マナス（瑪納斯）県、フトベイ（呼図壁）県とサワリ（沙湾）県、西南にカラマイ（克拉玛依）市、西にトリ（托里）県、ドルペルジン（額敏）県とそれぞれに隣接し、総面積は30,589.2km²である（高魁武 2007: 51）。

ホボクサイルの地勢は北高南低である。中部から北部にサイル山脈、ハタン山脈、アルガルト山脈など平均海拔2000メートル以上の山脈地帯があり、南部にはジュンガル盆地とつながる平均海拔400メートルの平原地帯がある（高魁武 2007: 80-87）。このような地勢であるため、ホボクサイル・モンゴル自治県は北部の遊牧地帯、中部の工業地帯、南部の農業地帯に分かれている。

2.2 居住する諸民族と民族間関係

2004年の統計によると（表1）、ホボクサイル・モンゴル自治県内には19の民族が居住し、総人口は49,876人である。そのうち漢族の人口は17,087人（34.3%）、モンゴルの人口は16,870人（33.8%）、カザフの人口は13,850人（27.8%）、残りの諸民族の人口は2,069人（4.2%）である（和布克賽爾蒙古自治県概況 2009: 29-30）。自治県が建立された1954年の時点では、ホボクサイルの総人口は12,217人であった。そのうち、モンゴルの人口は6,551人（53.6%）、カザフの人口は4,600人（37.7%）、漢族の人口は598人（4.9%）、ほかの民族の人口は468（3.8%）人であった（高魁武 2007: 119）。

ホボクサイルのこの50年間における人口変化



- シャリワン・ゲゲン十四世のオルドの位置。
- ホボクサイルに置ける各オワアの位置。
- ホボクサイルに置ける各寺院の位置。
- 〽 ホボクサイルに置ける各山脈。

図1 新疆におけるホボクサイルとホボクサイルに置ける各寺院、オワー、ゲゲンのオルド、県城町の位置を示す図である。

表1

	1954年		2004年	
	人口	割合 (%)	人口	割合 (%)
漢族	598	4.9	17,087	34.3
モンゴル	6,551	53.6	16,870	33.8
カザフ	4,600	37.7	13,850	27.8
その他	468	3.8	2,069	4.2
合計	12,217	100	49,876	100

をみると、漢族人口の増加が顕著である。総人口における比率が30%程度上昇し、モンゴルに代わってホボクサイルにおける最も多くの人口を持つ民族となっている。その背景は1949年に成立した社会主義政権の移民政策と関連する。その最初の移民の波は1950年代初期に見られた、少数民族地域での社会主義社会建設や辺境防衛という名目で内地から大量に送り込まれた漢族移民の波である。その後、1960年の大躍進の失敗や文化大革命、1978年から実施された改革開放政策、1990年代末期から実施された西部大開発政策という幾つかの時点で内地から漢族が大量に新疆へ移民する。その結果が現在のホボクサイルにおける漢族人口の変化に現れる。モンゴルとカザフの人口増加は同じレベルであり、漢族人口の急速な増加によってホボクサイルにおける民族構成はこの三つの主要な民族を柱とするものとなった。モンゴル、カザフ、漢族は言語、文化、宗教、民俗の面においても相違がある。

ホボクサイルにおける民族間関係の概略は以下の通りである。

まず、カザフをみると、カザフ諸部はジュンガル・ハーン国の時代にバルハシ湖西部のケブチェグ草原辺りに遊牧し、ジュンガル・ハーン国に属していた。1755年にジュンガル・帝国が崩壊した後、帝政ロシアと清朝の間で元ジュンガルに属するカザフに関する交渉が始まり、そのような情勢の下で、カザフの諸部は東へ移動する。1864年になると、彼らは北はイルティシュ河上流及びザイサン湖周辺、ホブト方面からタルバガタイやイリ周辺まで移住し、現在の新疆領に移住してきた（野田仁 2005: 260-230）。それから今日に至るまで、北新疆のイリ（伊犁）地区、タルバガタイ（塔城）地区、アルタイ（阿拉台）地区においてカザフは最も多くの人口を持つ民族となっていく。この三地区を合わせて、イリ（伊犁）カザフ自治州が形成されている。

イスラム教を信仰するカザフは遊牧民であり、

定期的に清真寺（モスクの中国名）で祈ることは少ない。カザフは殆どの場合家族単位で、自分の家で祈る。しかし、日常生活においては、イスラム教の戒律を守り、豚肉、ロバ肉、犬肉、動物の血を忌む。ホボクサイルにおけるモンゴルとカザフの関係をみると、仏教徒とイスラム教徒は基本的に信仰と生活習慣を相互に理解し、尊重し合っている。例えば、カザフの伝統的祭事であるナウルズ⁶⁾、エイド⁷⁾、クルパン⁸⁾にモンゴルは一切参加せず、モンゴルの伝統的祭事であるオワー、チャガン（正月）、ナーダム大会にカザフも一切参加することはない。しかし、同時に両者がそれらの祭事に干渉し合うこともない。両民族の間には、現在までの歴史の中で、伝統的祭事が行われる日には、相互の許可を得ずに祭事場に接近したり、祭事を見たりすることがないように注意する慣習が築き上げられてきた。その理由は、祭事の際、多くの人々が集まることで、異なる宗教を信仰するカザフとモンゴルの間に衝突やトラブルが起こることを避けるためである。

より興味深いのは、ホボクサイルにおけるモンゴルと、カザフを含むイスラム教徒との間で、それぞれが積極的に使用を禁止している言葉がみられることである。例えば、カザフは豚肉を忌み嫌うで、モンゴルはカザフのいる場所では豚肉を出さず、「豚」という言葉も言わないように努める。一方で、カザフはモンゴルのいる場所で「カルマガ」という言葉を言わない。「カルマガ」あるいは「カルムイク」という言葉は、昔からロシア人や中央アジアにおけるイスラム教徒が用いるオイラド・モンゴルに対する呼称だったが、そこには「不信心者」という意味があるからである。それは、イスラム教徒のオイラド・モンゴルに対する敵視の現れであり（摩尼 2002: 128-133）、オイラド・モンゴルは今日でも心良い思わないからである。そのほか、ホボクサイルのカザフの人々の間では「モンゴルのゲゲン」は夜に馬に乗って草原で走るとき、背

中から日が燃えるような光がきらめく」という表現や、「モンゴルのゲゲンには失礼なことではいけない」とも意識されており、モンゴルのシャリワン・ゲゲンをある程度尊敬し、畏れてもいる。

漢族をみると、ホボクサイルにおける漢族は中国内地の漢族と同様に宗教信仰は様々である。その中で、道教や仏教を信仰するものが多数いることが推定されるが、宗教を信仰しないものも少なくない（高魁武 2007: 747）。ホボクサイルにおけるモンゴルと漢族の関係をみると、文化的面で漢族のモンゴルに与えた影響は強い。従来、ホボクサイルにおけるモンゴル社会では、一般的にモンゴル語、カザフ語、ウイグル語で日常会話ができ、同様にこの地域のカザフやウイグルはモンゴル語で日常会話ができる。しかし、それぞれの言語は日常生活においてだけ使用し、学校での学習言語となることは殆どなかった。

しかし、中国中央政府は、移民政策による漢族人口の増加に伴い、1990年代中期から新疆の少数民族の漢語教育に力を入れ、「双語教育」制度⁹⁾を推進してきた。その影響を受けて、ホボクサイルのモンゴルの小学校、中学校は漢族の学校に合併され、モンゴル語教育とモンゴル語による教育は危機的状況に陥っている。また、生活習慣の面でも、漢族の春節とモンゴルのチャガンは同様の日であるとして、相互に訪ねる現象が一般化しつつある。2008年には漢族の伝統的祝日である元宵、清明、端午、中秋が法定祝日にされた影響で、モンゴルの中に、端午にちまき、中秋に月餅を食べるといった現象も見られるようになってきている。このようにホボクサイル・モンゴル社会は漢族文化からの影響が強化される傾向がみられる。

ホボクサイルにおけるモンゴルは、カザフを含むイスラム社会や漢族社会と日常的に接触する環境の下で、さまざまな産業に従事している。具体的には、伝統的な遊牧、あるいは移牧、牧

畜を伴う農業、公務員、企業経営者、企業労働者など多様な職種に就いている。しかし、どのような生活を営むモンゴルでも、チベット仏教を信仰し、仏教寺院に参拝し、シャリワン・ゲゲンに謁見することを願う。また、オワー祭りやナーダム大会に参加し、伝統的なモンゴル正月（チャガン）、チベット仏教の影響によるマイドル祭り¹⁰⁾、祖魯（ツウラ祭り）¹¹⁾を依然として行っている。

次の章では、仏教とホボクサイル・モンゴル社会との繋がりを概括し、特に仏教の指導者であるシャリワン・ゲゲンについて論ずる。

3. 仏教とホボクサイル・モンゴル社会

3.1 仏教信仰の歴史

モンゴルと仏教との繋がりは13世紀モンゴル帝国クビライ・ハーンの時期まで遡ることができる。その後、特にモンゴル帝国のクビライ・ハーンはチベット仏教サキャ派のパクパ・ロレイゲルツェンに国師号を贈って帝師としたことによって、仏教はモンゴル帝国の国教となり、モンゴル高原全体に広がった。だが、モンゴル帝国最後の皇帝である元順帝トゴンテムルが、1368年に朱元璋が率いる明に敗れてモンゴル草原に戻った後、隆盛を極めていたチベット仏教サキャ派の流れを汲むモンゴル仏教は、衰微の一途をたどった（嘉木楊凱朝 2004: 241-268）。それから200年経って、1578年に内モンゴルのトゥメト部のアルタン・ハーンはチベット仏教ゲルク派のダライ・ラマ三世ソナムギャムツォと会見する。岡田（2004）によると、アルタン・ハーンはソナムギャムツォにヴァジラダラ・ダライ・ラマ「持金剛大海」の称号を捧げ、ソナムギャムツォはアルタン・ハーンに「転千金輪」チャクラヴァルティン・セチェン・ハーンの称号を与えた。アルタン・ハーンは会見時の約束通りにフフホト（呼和浩特）に釈迦牟尼像を宝石や金銀で造った。さらにアルタン・ハーンの子孫たちは仏教の寺である三世寺を建てて、

百八巻のガンジュルをモンゴル語に訳し、宝石や金銀で飾った。ダライ・ラマ三世も約束通りにモンゴル地へ巡錫して、布教を行い、モンゴル地に円寂した。転生の四世のダライ・ラマもアルタン・ハーンの子孫に認定された（岡田 2004: 271-275）。この両者の会見はチベット仏教のモンゴルへの再伝播の嚆矢となったわけである。

四オイラドがチベット仏教を信仰し始めたのは1616年のことである。オイラド人が自ら作った最初の史書であるガイワンシャラブ著の『四オイラド史』には、四オイラド各部族の首領がそれぞれ息子を一人ずつ僧侶として寺院へ送り、チベット仏教を信仰し始めたことと記されている（ホ・バダー 1985: 234-264）。佐藤（1957）によると、その後、チベット側では1620年代から1640年代にかけてゲルク派がライバルであるカルマ派、ニンマ派に圧迫されていた。この圧迫を契機にして危機にあったゲルク派は四オイラド連合のホシュド部グーシ・ハーンに使者を派遣し援助を求める。1637年にグーシ・ハーンは四オイラド連合軍を率いて青海に入り、1642年になるとチベット全体を統一する（佐藤 1957: 103-126）。そこでゲルク派ダライ・ラマはチベット仏教の最高指導者となり、その政権の建立に貢献したホシュド部、トルグド部の王侯に対してハーンの称号を与えたという（石濱 2011: 218-236）。17、18世紀に四オイラド各部族の上層部とチベット仏教ゲルク派ダライ・ラマとの関係は密接となり、仏教の四オイラドへの伝播を加速した。一つの例を挙げると、当時、遙かロシアのイジル河畔に遊牧していたトルグド部の貴族や人々が定期的にラサに巡礼していたという記録がある（宮脇 1995: 334-341）。

1771年にトルグド部がロシアから帰還した後、ホボクサイルへ来た一部トルグド人やその王族らは仏教寺院を建設し始めた。1770、80年代にはホボクサイルで、六ソム・ホシューの大寺、ラブラン寺、オワート寺、ジャサクイン・ホシュー

の寺、シエムヌルイン寺とタイジイン寺という六つの寺院が建設され、仏教巡礼が行われていた。今日のホボクサイルでは、上述した六つの寺院の中、六ソム・ホシューの大寺、ラブラン寺、オワート寺、ジャサクイン・ホシューの寺という四つの寺院が残されている。これらの寺院は、ラマ、ゲルン、ゲセル、ニルブ、ブルフチなどを完備した寺院官職システムを保持しており、仏教の経典も完璧に保存している（ウ・エルデニ 2004: 309-325）。この四つの寺院は今日ホボクサイル・モンゴルの宗教活動が行われる主な場所であり、現地のモンゴル人の仏教信仰の基盤になっている。

3.2 活仏制度の歴史とシャリワン・ゲゲン制度の由来

ホボクサイルにおけるシャリワン・ゲゲン制度の由来を検討するに先立ち、シャリワン・ゲゲン制度という制度の出現とその意味に関して整理する必要がある。ゲゲンの転生制度は14世紀チベット仏教のカルマカギユ派によって確立された伝統の一つである（山口 1988: 131-132）。後にこの制度はチベット仏教界の他の派にも伝承される。特にツォンカバ・ロブサンタクバが創立したチベット仏教ゲルク派は代表的である。ツォンカバは宗教改革者であり、僧侶の肉食、妻帯等を禁じた。従来高德のラマは世襲によりその僧位を継承していたが、妻帯を禁じたことで後継者の選出に苦しむこととなり、この活仏思想を利用し始めたのである（矢崎 1961: 65-75）。ツォンカバの二人の弟子であるダライ・ラマ一世とパンチェン・ラマ一世は、転生制度によってゲルク派の法脈を継承することになった（嘉木楊凱朝 2004: 193）。その後、1578年にダライ・ラマ三世とアルタン・ハーンとの会見によって、この制度がモンゴル地域へ伝承された。

そもそも、ゲゲンは、修行を積んで成仏した人を指したもので、成仏した人が円寂した後、引き続いて一切の衆生を救済するために、

再び人間界に現れることをいう。主に人間の肉体のすがたをとって現れることが多い（嘉木楊凱朝 2004: 190）。そのような高僧が円寂すると、生まれ変わりとされる子供（ほとんどの場合男の子を中国語で「転世靈童」と呼ばれる）が探し出され、その高僧の生前の財産や地位を受け継ぐ（広池 2004: 1-10）。このような制度の下で、チベット仏教界のダライ・ラマ、バンチェン・ラマ二大活仏はそれぞれ十四世と十一世まで継承されている。ホボクサイルにおけるシャリワン・ゲゲンも同じような形で、現在の十四世に至った。

シャリワン・ゲゲンはチベット仏教界の歴史において有名な活仏の一人である。初代のブイドン・リンブワチェから現在のシャリワン・ゲゲンに至るまで、既に十四世続いている。そのうち、第一世から第七世がチベット、第八世から第十一世が青海、第十二世から十四世がホボクサイルから、それぞれ認定されてきた。

シャリワン・ゲゲンのシャリとはチベット語であり、植物や草の芽という意味である（楊輝麟 1997: 249-254）。後にこのシャリは仏教寺院の名となる。バ・バトバヤル（2011）によると、第一世のシャリワン・ゲゲンであるブイドン・リンブワチェは当該寺院における大ラマとなった後、やがて活仏となった。シャリ寺院の大ラマ、ブイドン・リンブワチェは円寂した後、その転生ラマが二世のシャリワン・ゲゲンとなった。シャリワン・ゲゲン七世のとき、当時青海の賽柯合寺ツンプ・ゲゲンの要請を受け、賽柯合寺へ来て、ツンプ・ゲゲンとともに賽柯合寺のゲゲンとなり、青海に示寂する。その後、シャリワン・ゲゲン十一世まで青海から認定される（バ・バトバヤル 2011: 159-169）。

1771年、トルグド部が帰還した後、トルグドの王侯、貴族らが青海の賽柯合寺へ行って礼拝を行い、賽柯合寺の施主となった。青海賽柯合寺の活仏であるシャリワン・ゲゲン十一世は仏教を信仰する人々の要請を受け、旧トルグドの

地に来て布教を行い、1856年にエルインハブルガ（現在の烏蘇市）で円寂する。転生である二世のシャリワン・ゲゲンがホボクサイルの六ソム・ホシュー（旧ツブグドルジに所属したホシュー）から認定される。これがホボクサイルにおけるシャリワン・ゲゲン制度の開始である。シャリワン・ゲゲン二世は当時ホボクサイルにおける六ソム・ホシューの大寺、ラブラン寺に居住していて、1892年に円寂した。三世のシャリワン・ゲゲンが1893年にワンギン・ホシュー（王の旗）から認定されて、1940年に円寂する。三世のシャリワン・ゲゲンはワンギン・ホシューにあるオワート寺で居住し、1937年から1940年のホボクサイルの王位を代行していたこともあった。

本稿の対象となるシャリワン・ゲゲン十四世は、1942年にホボクサイルのジャサクギン・ホシュー（ジャサクの旗）、ブルス・ソムのバヤンブラグという人の家で生まれ、本名はガルサン・トブドンベルレイである。十四世のシャリワン・ゲゲンは1948年に認定され、1949年から1956年まで、現在のホボクサイル鎮にある王府の近くにあったゲゲン府で仏教の経典を学んだ。1957年から1959年まで青海のグンブン寺へ行って経典を学び、1960年から1963年まで北京にある中央民族学院に入って勉強した。今日、シャリワン・ゲゲン十四世は中国政治協商会議議員、新疆ウイグル自治区政治協商会議委員、新疆ウイグル自治区仏教会会長などの要職を務めている（ウ・エルデニ 2004: 303-308）。

従来、蒼生天を信仰して来たモンゴルは、チベット仏教を信仰し始めた後、蒼生天の代わりに観音菩薩を信仰することになった。したがって、チベット仏教を信仰するモンゴルの人々にはゲゲン（あるいは活仏）は観音菩薩の化身であると信じられている。そのため、ホボクサイルにおけるシャリワン・ゲゲン十四世も現地モンゴルの間で観音菩薩の化身に相当する位置にある。この150年間、シャリワン・ゲゲンはホボ

クサイルから認定されてきたため、ホボクサイル・モンゴルの間にはシャリワン・ゲゲンに関する独特の文化や習慣が構成された。次の章で具体的な例をあげて、シャリワン・ゲゲン十四世のホボクサイル・モンゴル社会における役割を検討する。

4. シャリワン・ゲゲン十四世の訓話と影響

本章は、シャリワン・ゲゲン十四世の訓話に焦点を当てる。ホボクサイルのモンゴルはシャリワン・ゲゲンを観音菩薩の化身と信じているため、その訓話を仏の教えと称する。ここで主に扱おうとしているシャリワン・ゲゲンの訓話は、日常生活をめぐるものと医療・災害をめぐるものという二つの側面がある。

4.1 日常生活をめぐる世俗的訓話

1) 民族のリーダーという側面

仏教徒となったホボクサイル・モンゴルはシャリワン・ゲゲンを信仰した150年間に、ゲゲンのオワー¹²⁾という祭りを創り上げた。オワーはモンゴル人が昔から天神、地神、山川の神々を祭祀する場であり、病気や災害から身を護り、安定や幸福、富裕をもたらすと見なされている。オワーは広く草原で遊牧生活を営む遊牧集団や牧民たちにとっては放牧地の境界を示す役割もあり、また人々が集まりやすいところに築かれることもある(後藤 1956: 47-71)。清朝時代以降のオワーはホシュー・ソムなど清朝行政単位を区画するために設けられたものが多く、ホボクサイルにおいてもその通りである。1771年にロシアのイジル河畔から帰還したトルグド部が清朝の支配下に入り、盟旗制度に編制された。当時ホボクサイルにトルグド北路盟を設け、その下に三つのホシューを、さらにその下に十四のソムを設置し、盟とソムごとにオワーを設立した。こうした盟、ソムのオワーは今日に至っても残されており、それぞれのソムの後裔たちが旧行政区分にしがたって分かれてオワー祭り

を行っている。その他、ホボクサイル・モンゴル社会では、宗教信仰と関連するオワーもある。シャリワン・ゲゲンのホボクサイルへの布教と、後の認定を記念するために設立したゲゲンのオワーが四つあり、1984年のパンチェン・ラマ十世のホボクサイル訪問を記念するために設立したパンチェンのオワーが三つある。こうした盟、ソムのような旧行政単位によるオワーと、宗教信仰と関連するオワーによって、ホボクサイルのオワー祭りの文化が構成される(表2)。以下には、ゲゲンのオワー祭りの流れを紹介した上で、祭りにおけるシャリワン・ゲゲン十四世の訓話を考察したい。

一般のソムのオワー祭祀は、当該ソムに所属する人々だけが参加し、準備の仕事を当該ソムにおけるジャングとクンド¹³⁾の二人が担当する。しかし、ゲゲンのオワー祭祀に参加する人々はホボクサイルに生活する全モンゴルであり、ホボクサイルにおける十四ソムの人々が順番に祭祀を担当する。このオワー祭祀は一般に二つの段階から構成される。つまり準備段階と祭祀当日である。

準備段階をみると、まず前の年のゲゲンのオワー祭りの際に、翌年の祭りを担当するソムを決める。祭りの担当に当たったソムのジャングとクンドの二人が仕事を受ける。オワー祭りを行うには相当な経費が必要となるため、その経費を当該ソムに所属する各戸が担う。それを現地語でシャンディウという。近年の状況を見ると、一般にジャングとクンドが当該ソムに所属する家々を回って必要となる資金を集める。当該ソムに所属する人々のもう一つの義務はオワーの当日に行われる競馬やブフ(モンゴル相撲)大会の賞を用意することである。一般に毎年ラクダ、ウマ、ウシ、ヒツジ、ヤギを合わせて十頭ほど必要とするので、それぞれ所属する家々にお願いする。また、オワー祭祀当日において、集まった人々に食べ物と飲み物を用意する。それを「供物を捧げる」という。オワー祭

表 2

分類	オワー名	位置	参加者	
宗教	ゲゲン	バイシントイン・サラ	バイシントイン・サラ (GBA)	全ホボクサイルのモンゴル (旧盟の後裔)
		ブス・トング	ブス・トング (GBU)	旧六佐の旗の後裔
		オルザトイン・アム	ジムギルイン・アム (GO)	旧王の旗の後裔
		クルン・オンドル	クルン・オンドル (GK)	旧ジャサクの旗の後裔
	パンチエン	ハザーグ	ハザーグ (BH)	旧六佐の旗の後裔
		コク・フドグ	コク・フドグ (BK)	不明
ヌールイン・コーベイ		ヌールイン・コーベイ (BN)	不明	
行政単位 (旧)	盟	バヤン・オンドル	バヤン・オンドル (C)	全ホボクサイルのモンゴル (旧盟の後裔)
	王の旗	大右翼	オルザト・サラ (OYB)	旧大右翼佐の後裔
		小右翼	シャル・ブルグ (OBB)	旧小右翼佐の後裔
		大左翼	バヤン・オンドル (OYZ)	旧大左翼佐の後裔
		小左翼	ハダト (OBZ)	旧小左翼佐の後裔
	ジャサクの旗	ブルス	ホングル・オルン (ZB)	旧ブルス佐の後裔
		マーニンキン	チンディンのショブグル (ZM)	旧マーニンキン佐の後裔
		ジャラキン	ニュツクン (ZJ)	旧ジャラキン佐の後裔
		ゲキレーキン	ハル・ハマル (ZG)	旧ゲキレーキン佐の後裔
	六佐の旗	大右翼	ケリム・ハル (ZYB)	旧大右翼佐の後裔
		小右翼	ドムド・ハルガイト (ZBB)	旧小右翼佐の後裔
		大左翼	ハルガイトイン・サラ (ZYZ)	旧大左翼佐の後裔
		小左翼	ゲン・サラ (ZBZ)	旧小左翼佐の後裔
		シェベヌル	バヤン・オワー (ZS)	旧シェベヌル佐の後裔
		ホシュド	ドラーン・モドン (ZH)	旧ホシュド佐の後裔

※当表にあるオワーの名と位置を図1と比較しながら見ると、分かりやすいと思われる。

祀の供物とはヒツジ肉である。毎年の供物は少なくとも、五頭ほど必要であり、人々は自主的に持参する。同時に馬乳酒、チーズ、モンゴル・ミルクティ、バターなどを自主的に持って行く人々も多数ある。

祭り当日の経過をみると、人々は朝早くから来て、オワーに登って礼拝する。その後、オワーに向かって左側にゲゲンとラマが一列に並んで座り、右側に一般の人々が並んで、仏教の経典を読む。仏典を読み終えると、ゲゲンに率いられて「キモリ・ダヤルフ」を行う。「キモリ・ダヤルフ」とは、モンゴル語で招福儀礼のことであり、皆オワーの供物から白い食べもの（奶酪、

乳菓、砂糖）をもらい、それらを右手に揚げながら、オワーを右回りに三回回り、それぞれの幸福を祈る。招福儀礼が終わった後、皆順番に並び、ゲゲンに対する謁見の儀式を行い、それぞれのお願ごとを持って祈願する。このとき、競馬に参加する子供たちは馬に乗り、競馬のスタート地点へ移動する。ホボクサイルにおけるゲゲンのオワーや一般のオワー祭りにおいては、かつて弓術、競馬、相撲がモンゴルの伝統的男性の三種芸競技だったが、そのうち弓術は既に行われなくなってしまったが、競馬と相撲は今でも盛んである。競馬は子供たちが中心で、相撲は大人たちが中心に参加することになっている。

つぎに、ゲゲンのオワー祭りにおける、シャリワン・ゲゲン十四世の訓話を分析する。近年のオワー祭りにおいて、シャリワン・ゲゲン十四世のホボクサイル・モンゴルに対する訓話は重要なイベントとなっている。オワー祭りにきた人々にとって、シャリワン・ゲゲンの訓話は、老若男女を問わず、効果を持っている。その訓話の内容を概括してみると、以下のようである。

一つ目は、気候環境に順応し、夏営地で長く放牧することを勧めることがある。現在のホボクサイルでは伝統的遊牧生活を営んでいる二千戸以上の遊牧民がおり、その多くはモンゴル人である。遊牧民の放牧地は冬営地、春営地、夏営地、秋営地からなる。ホボクサイルにおける冬営地は中南部のハトン山脈、セルク山脈、アルガルト山脈、デルーン山脈とサラブル山脈の山麓や東南部にあり、毎年11月から翌年の4月末までそこで過ごす。夏営地は北部のサイル山脈と西北部のシャルガン・シリにあり、毎年6月から9月までそこで過ごす。秋営地と春営地は冬営地と夏営地の間であったが、2002年から政府の方針により、禁牧なって秋と春の営地はなくなった。そこで、夏営地に長く過ごすことはこの放牧地不足の問題を解決する有効な方法となる。この訓話では、シャリワン・ゲゲン十四世は牧民の立場になって喫緊の問題を考え、その対策を勧めており、信者の生活に寄り沿った親密、信頼関係が強化されることに繋がっている。

二つ目は、近年ホボクサイル・モンゴル自治県の東北部で頻繁に起きているカザフの遊牧民との放牧地をめぐる争いについてである。この地域では隣接するアルタイ地区のカザフ遊牧民との間で放牧地をめぐる争いがたびたび発生している。また、カザフスタン共和国から国境を越えた泥棒に家畜を盗まれる事件も増えている。しかも、ホボクサイルの北西部にあるアムントング（阿吾齊）国境警備隊¹⁴⁾はカザフスタンの泥棒を袖手傍観する一方で、モンゴル遊牧民の家畜を、耕地に入ったという理由で強奪する事

件がたびたび発生している。しかし、多くの場合モンゴル遊牧民は国境警備隊との関係が悪化することを避けて、通報せずに泣き寝入りすることになる。ゲゲンはこれらの人々に対して、国境警備隊に家畜を押さえられた時、家畜の数、経緯を明確に書き、自分に渡すように要求し、今後同じようなことが起きれば、シャリワン・ゲゲン自らが北京に出向き、中央政府と直接交渉するから、決して牧民たちは連合して相手と衝突しないようにと諭している。同時にシャリワン・ゲゲンは皆に我々は法を習い、法に従い、法をもって身を守るべきであると説いている。シャリワン・ゲゲンのこのような教えは現地モンゴルの社会行動を統制し、牧地をめぐるトラブルを未然に防ぐ効果を持っていると考えられる。

三つ目は、飲酒運転による交通事故に注意するようにとの訓話である。最近ホボクサイルの若者たちは酒を飲んでバイクや車を運転し、交通事故を起こすことが増えている。特にホボクサイルのワンギン・ホシュー（王の旗）の統計¹⁵⁾によると、2008年10月から2009年10月までの一年間で交通事故によって命を失った人の数は40人以上にのぼっており、多くは無免許運転であった。シャリワン・ゲゲンは飲酒運転、無免許運転を禁止するように指導している。シャリワン・ゲゲンの言葉はいずれも日常的な会話的であり、仏教学の専門的な言葉や用語は殆ど使用しない。例えば、「あなたが飲酒運転で事故を起こせば、自分の家族を悲しませる。またほかのだれかの命や健康を奪うかもしれないし、一人の若者の未来を壊し、年を取った親、幼い子供につらい思いをさせることになるかもしれない。あなたは深い罪を犯すことになるのだ」と述べ、人間の「慈悲」を溢れさせ、他人に嘆きや苦しみを与えることの罪悪感を人々に直に感じさせるようにしている。

こうしたシャリワン・ゲゲン十四世の訓話は、宗教信仰に直接触れることはせず、それよりも

今日のアボクサイル・モンゴル社会における幾つかの重要な問題に関して積極的に取り組む姿勢を見せている。それは、活仏というより、人々を導く年長者や政治に携わる政府関係者に近い役割を果たしているように思われる。

2) 他民族との共生と民俗習慣の見直し

シャリワン・ゲゲン十四世の訓話はオワー祭りにとどまるわけではなく、モンゴル伝統の正月祭りにも行われる。以下は2013年正月におけるシャリワン・ゲゲン十四世のアボクサイル・モンゴルの人々に対するテレビ訓話を取り上げて分析する。具体的な内容は次の通りである。

辰年が終わり、巳年を迎える正月が近づいている今、アボクサイルのテレビ局の放送を通じて、アボクサイルだけではなく、全新疆に生活するモンゴルの皆様に新年のご挨拶を申し上げます。

正月は我が民族に昔から伝わってきた一つの伝統的祭祀であり、特に文化大革命以前においては、文化的な雰囲気には溢れた行事でした。しかし、文化大革命で我が民族だけではなく、全国で深大な文化的な危機に見舞われました。そのために、我が民族の正月風俗にも様々な墮落した、ぜいたくな悪い習慣が入ってきました。一部の人は、このような悪い習慣を我が民族の伝統的文化であると誤解し、三十年以上も続けています。

我々は墮落した、ぜいたくな、良くない習慣を捨てるべきであり、それと同時に他民族から受けるあらゆる悪い影響から抜け出さなければなりません。兄弟民族から見習うと言っても他民族の悪いことを学ぶはいけません。必ず長所を見習うようにしましょう。

去年の正月には一つの良い傾向が現れました。それは、新年の挨拶回りの際、菓子や酒を持って行くことをやめたことです。私はそれを非常に嬉しく思っています。今年の正月

には皆にはもう一つ、やめてもらいたいことがあります。それは年玉のことです。正月に子供にお年玉を与えるのは漢民族の文化です。我々はこのような悪い習慣を受け入れてしまいましたが、今後は一切やめて欲しいと思います。逆に漢民族の勤勉などところを見習い、新しい一年に向上心を持ち、幸せな生活を築くために励むべきだと思います。

アボクサイルにおける漢族人口の増加に伴い、漢文化はモンゴルの日常生活に、深く浸透している。シャリワン・ゲゲン十四世の訓話はこうした漢化にいかに対応するか、を考えさせる。別の事例によると、昔のアボクサイルには新年の挨拶において回りに入って来る子供に菓子や飴などをあげる習慣があったという。しかし、近年漢民族の影響を受けたモンゴルが子供たちに金銭を与えるようになってきているという。しかも、最初は人民元で五元か十元ほどだったものが、最近では百元、二百元へのぼり、正月の支出の大きな部分を占めるようになって、人々が重荷と感じ始めたのも事実である。筆者が何人かにインタビューしたところ、ゲゲンの訓話に従おうとする人は多く、お年玉の習慣をやめることに賛同していた。彼らによると、親戚や同僚、上司の子供にあたえるお年玉の額が関係の親しさによって異なり、時には何百元に達することもあり、普通の公務員にとっては、相当な負担になっていた。彼らは、お年玉の習慣をやめることが子供たちの成長にも良いことであると主張している。要するに、中国の漢文化という圧倒的マジョリティ文化に包囲されているような環境下に暮らすアボクサイル・モンゴルに対して、シャリワン・ゲゲン十四世は伝統文化を守り、継承することと、他民族の文化を取捨選択し受け入れることの重要性を呼び掛けているのである。

いずれにせよ、本節で取り上げた二つの事例が示すのは、新疆アボクサイル・モンゴル自治

県では、モンゴル伝統のオワー祭りと正月という一年の節目となる行事において、人々に演説するのは政府関係者ではなく、シャリワン・ゲゲン十四世だということである。現地における年長者の語りによると、本来のオワー祭りでは、盟長・旗長をはじめとする政府関係者や行政関係者が人民に対して演説をし、年間の行政を定めてきたという。現在のシャリワン・ゲゲン十四世の訓話がかつ盟長・旗長の使命を代行しており、さらに旧チベット世界にあった政教政権の痕跡が現れているといえる。旧モンゴル社会では、活仏はチベットと同様に政府のトップではなかったが、貴族たちによって認定され、政治的影響力が大きかった例が少なくない。シャリワン・ゲゲン十四世による二つの訓話の事例は、周辺社会に浸透している漢化・多元化の情勢に対抗するより、他民族から受け入れるべきものを受け入れて、自民族の伝統を守りながら周辺社会に適応することを呼び掛けるという傾向があり、地域開発論の「内発的発展」と似たような視点を唱導しているともいえそうである。

4.2 医療・災害をめぐる訓話

1) 医療儀礼の唱導

ダライ・ラマ十四世は「私たち人間の心の中には、自分の思いによって生じてくるさまざまな苦しみが存在しているので、そういった苦しみを鎮めるための対策として、宗教への信仰というものが出てくるわけです」（ダライ・ラマ14世 2000: 10）と宗教信仰の必要性を述べている。それと同様にモンゴルにも「疑い深いために病気になる、敬虔な信仰をもつことによって病気が治る」という諺がある。これらの表現は、人間は常に多くの苦しみ、病気、不安、怖れを持っていて、それを信仰の力で治すことが可能であると考えられてきたことを示す。

仏教徒であるホボクサイル・モンゴルはシャリワン・ゲゲンを信仰し、ゲゲンの教えに敬虔な態度を持って接している。この地域の人々は、

病気になったり、家内で悪いことが起り続けたりとすると、シャリワン・ゲゲンに謁見することが多い。こうした儀礼を現地のモンゴル語では「モルゴル」という。

近年、ホボクサイル・モンゴルの中で高血圧症となる人が増加し、社会的な問題となっている。これがシャリワン・ゲゲンと謁見するもう一つの理由となっている。高血圧症の人々のうち、最も多いのは中年男性である。本節で取り上げるNさんもそのうちの一人である。筆者は2013年7月15日、ブストング牧場の牧民であるNさんの家を訪問してインタビューをした。

Nさんは今年四十一歳、家族三人で暮らしている。遊牧民であるNさん一家は季節の変化に従って遊牧生活を送っている。Nさんの冬営地はデルーン山脈のマームというところで、春営地と秋営地はデルーン山脈北部にあるケレトゲイというところで、夏営地はサイル山脈のモガートというところにある。毎年、冬営地に11月から4月の間、春営地で4月から6月の間、夏営地に6月から9月、秋営地に9月から11月の間それぞれ過ごしている。

現在の家畜の数はヒツジとヤギが600頭、ウシが60頭、ラクダが5頭、ウマ群が一群25頭、乗用のウマが3頭である。十年前乗用のウマは15頭いたが、バイクを買うためにほとんどを売ってしまったという。現在乗用のウマは冬営地にいる11月から翌年3月の降雪時に使うだけであり、ほかのときはバイクに乗っているという。Nさんは夏営地から県城の町に往復するには、ウマでは2日かかるが、バイクならば4-5時間で行けるので、バイクはウマより早くて便利であるという。だが、問題はバイクに乗るとウマに乗る時よりも運動量が減ってしまうことだともいう。

一方、Nさん一家の食事について聞くと、一年の殆どが肉食である。主にウシ肉、ヒツジ肉、ヤギ肉を食べている。ウシ肉は主に冬の食材であり、モンゴル語でイディシ（冬の食）と呼ぶ。冬のイディシとして毎年12月から翌年4月までに

一頭分のウシの肉を食べるといふ。ヤギ肉は主に夏の食である。それは冷めやすいからである。ヒツジ肉は一年中食べる肉である。Nさん一家は年間にヒツジ20頭、ヤギ5頭ほどを食べるといふ。ここで、注意する必要があるのは、夏になると、乳製品の消費量が増えるため、肉食量はある程度減少することだ。また一日の食事のパターンを見ると、朝はモンゴル・ミルクティ、ボールスグ（モンゴル伝統のパン）、バターで、お昼は適当（夏は野菜が食べられるが、冬は朝食と基本的に同じ）で、夜は殆ど肉食である。そのほか、ホボクサイル・モンゴルの料理やミルクティには食塩で味付けするのが一般的である。この食事のパターンは、小長谷（2004）による、「夏に豊富になる乳製品は「白い食べもの」と総称され、冬によく食べる肉類は「赤い食べもの」と総称される。……実際のところ、朝と昼は随時、お茶を飲み、もっぱら乳製品を食べる「軽食」であるのに対して、夜は基本的に肉を食べる」（小長谷 2004: 69-74）という指摘とはほぼ一致している。このようなモンゴルの食事のパターンは社会変化によって、人々の生活に負の影響を及ぼしている。今回インタビューをしたNさんは2009年から高血圧症となり、県城町の病院から新疆ウイグル自治区の首府であるウルムチの病院まで治療に行ったが、あまり効果がなかったという。そこで、Nさんは2010年夏、シャリワン・ゲゲンと謁見したところ、ゲゲンはNさんにマツグ・バリーフという断食療法を勧められたという。

断食療法はチベット仏教の修行と密接な関係があり、モンゴルがチベット仏教を信仰した後、その生活に深く浸透し、主な民間治療法の一つとなった。その中核は食生活を調整することによって病気を治療することにある。肉食を主とするホボクサイル・モンゴルにとっては、肉食を完全にやめることはできない。そのため、毎月特定の日を選んで、それを制限するのが最も適切な方法となる。断食療法をする人は、旧暦

で毎月の八日、十五日と三十日に肉類を食べずにコメ、麺類などの白い食べものを食べ、毎食の食塩の量を減らす。飲み物には食塩を入れずに、キミル¹⁶⁾、ミルク、馬乳酒とモンゴル・ヨーグルトを飲み、同時に平日の食べる量のある程度減らす。これが伝統的断食療法である。ほかには月に九日間の断食療法があり、毎月の六日、七日、八日と、十三日、十四日、十五日と、二十八日、二十九日、三十日をそれぞれ一つの単位として実行する。

Nさんは、2010年夏からシャリワン・ゲゲン十四世の教えにより、断食治療を実施しはじめ、2012年秋になると、高血圧症はほぼ完全に治ったという。Nさんは現在でも普段の食事において、肉食や食塩の量を制限しているという。今回のインタビューの最後に、断食療法はモンゴル社会に長期間浸透した民間医療であるため、Nさんが自らの意志で実施することができないものかと、筆者が聞くと、Nさんはできないと答えた。なぜなら、シャリワン・ゲゲンの教えを守るからこそ実践できなからだという。

この事例で重要なのは、シャリワン・ゲゲン十四世は医者のように薬を出しておらず、信者の病気を早めに直し、健康になりたいという心の底からの願いと、ゲゲンが必ず病気から救ってくれるという信仰的あり方を利用して、治療に成功していることである。

2) 招福儀礼に伴う招来

ホボクサイルの人々は自分自身、家族、あるいは周囲の人々に不幸なことが起ると、その原因を探し求めるようになる。その時、人々が答えを探す手段は、その人が有する文化、風俗、さらには時代状況の相違によって様々であり、不幸に直面したとき、不安や怖れに対処するためいろいろな方法をとる。

ホボクサイル・モンゴルは家庭のなかに病気、事故や悪いことが続くとき、その家の運が衰退していると考え、運を向上させるためにシャリ

ワン・ゲゲンを招いて招福儀礼を行う。この招福儀礼について、ホボクサイルの旧ジャサクギン・ホシュー出身のDさんの協力によりインタビューを行って、データを収集することができた。Dさんは1936年に生まれで、インタビュー当時78歳であった。Dさんは7歳のとき、ジャサクギン・ホシューの寺院に入り、仏教経典を学んだ。しかし、1940年代末期の混乱でジャサクギン・ホシューの寺院が破壊され、当時13歳だった彼は寺院をやめ、還俗した。そのDさんが寺院を辞めた1948年前後に十四世のシャリワン・ゲゲンが認定されている。シャリワン・ゲゲン十四世と同じホシュー出身で、寺院において仏教経典を学んだ経験もあることから、Dさんは招福儀礼に関するインタビューを行うのに最もふさわしい人物だった。以下は、招福儀礼の過程に関するDさんの説明である。

シャリワン・ゲゲンを招来するには、その家の主人がゲゲンのオールドを訪問し、両手でハダグ¹⁷⁾を持って、ゲゲンに謁見し、招来をお願いしなければならない。すると、ゲゲンは自分の時間が空いているときを教え、右手を彼の頭にあて祝福を与える。

ゲゲンを招来することは非常に重要なことであり、その家の近隣や親戚が集まり、準備を整える。招来する家は家の中から、庭、家畜小屋まで掃除をし、男の人はヒツジを屠ってゲゲンが食べる供物を用意する。そこで、用意したヒツジ肉をゲゲンが到着するまでに煮て、そのうちのウーツェ（背）とトルガイ（頭）¹⁸⁾を主な供物として一つの皿に、ほかの肉を一般の供物としてもう一つの皿に用意する。女の人たちはお菓子を作り、モンゴル・ミルクティ、馬乳酒、ヨーグルトなどを用意する。

ゲゲンが人々の家を訪問する時間は多くの場合昼時である。それは、モンゴル語でウデルナイといい、昼食を食べに行くという意味である。昼食の時間前にこの家の主人がゲゲンを迎えに行き、家まで案内をする。ゲゲンが到着すると、

その家に集まってきた人々は皆両手にハダグを持ち、外までゲゲンを迎えに出て、ゲゲンを迎える歌¹⁹⁾を歌いながら家の中に招き入れる。

シャリワン・ゲゲンは家に入った後、上座に座り、供物を食べる。まず、ゲゲンは主な供物であるウーツェ（背）とトルガイ（頭）を当該家が祭祀している仏に差し上げて、仏像²⁰⁾の前に置く。次に、一般の供物を食べ、モンゴル・ミルクティや馬乳酒を飲みながら、この家のなかで起きた事情を聴き、主人から子供まで、順番に頭に手をあて、祝福を与える。また、家の運を向上させるため、寺院へ行ってお経を読んでもらうように教える。状況によってお経の種類が異なる。

その家の事情を聴き終わると、近隣、親戚の人たちもゲゲンの祝福を受け、自身や家族の不幸なこと、あるいは選択に迷っていることなどを打ち明け、ゲゲンに訓話をお願いする。筆者も、2009年の8月県城町にある親戚の家にゲゲンを招来した際、日本へ留学することを述べ、教訓を願ったところ、「若者が夢、目標を持つことは非常に良いこと、怖れることはなく、ただ、留学先についても勤勉であることを忘れずに」と励ましてもらったことがある。

シャリワン・ゲゲンが人々の家を訪問する際、留まる時間は長くない。僅か一時間程度である。そして、シャリワン・ゲゲンが昼食を食べ終わると、当該家の主人はゲゲンに感謝し、ウマやウシ、またはそれに相当するものを捧げる。最後にシャリワン・ゲゲンはこの家の右回って帰る。その際、残った人々はこの一年間の幸福や良い運をゲゲンにお願いし、その後シャリワン・ゲゲンの食べ残した供物を食べ、招来の儀式が終わる。

このようなシャリワン・ゲゲンを自宅へ招来する習慣は新疆のモンゴルの中で、ホボクサイルのみに存在する。シャリワン・ゲゲンを招来することは当該家において、悪運を払う儀式のようなものである。実際、当該家の不幸な出来

事は既に起きたことであり、人々は不幸の原因を自分の力で解決できないため、将来について不安を持つ。しかし、シャリワン・ゲゲンを招来し、訓話や祝福をしてもらうことで、当該家に入った悪いものが徐々に追い出されていくとされる。要するに、シャリワン・ゲゲンを招来することは、当該家の悪運を変え、人々に精神的安定感を与える機能を持つのである。

本節で取り上げた二つの事例を比較すると、第1節で扱った日常生活に関する訓話は、シャリワン・ゲゲン側が主体となっていく行為であるのに対して、第2節で扱った医療儀礼や招福儀礼は信者の側が主体となっている。信者の主体的な行為である、謁見や招来の願いに対して、シャリワン・ゲゲンは彼らの病気や不安、あるいは悪運を取り除く機能を果たすが、このような機能は人間の目には見えない、手で触れることができないことであり、信者が有する信仰に関わるあり方に依拠している。

また、その他のモンゴル社会では、これらの医療行為や招福儀礼は普通のラマ（僧侶）が行うことが多い。それに対して、ホボクサイルでは活仏であるシャリワン・ゲゲンが行うが、それは、この地域がシャリワン・ゲゲンの出身地であって、一般の人々と活仏との繋がりが極めて深いという、地域的な特徴に由来すると考えられる。

5. おわりに

本稿では、転生活仏であるシャリワン・ゲゲン十四世に焦点を当て、その日常生活をめぐる訓話と医療・災害をめぐる訓話について検討した。それをまとめれば、日常生活をめぐる訓話は、現地モンゴル人が最も喜ばしいときであると感じているオワー祭りや正月において、シャリワン・ゲゲン十四世が主体的に行う事例であり、医療・災害をめぐる訓話は現地モンゴルの最も苦しいときを代表する病気や不幸を直面する際に差し迫った、シャリワン・ゲゲン十四世

に謁見や招来を依頼する信者が主体的に行う事例である。オワー祭りにせよ正月にせよ、あるいは病気や災害に見舞われたときにせよ、それらはいずれも非日常的な状況、あるいは極端な状況でもある。つまり、ホボクサイル・モンゴルではそのようなときに、シャリワン・ゲゲンを必要とし、他方ゲゲンもそうした信者の信仰によって存立しえる。ゲゲンは人々の社会生活や心に寄り沿った助言に努め、それが両者の関係をより近密なものへと結びつけている。こうしてシャリワン・ゲゲン十四世はホボクサイル・モンゴルの信仰を代表する明示的なシンボルとなってきたといえる。

今回の調査は短期間で行われたものであるため、シャリワン・ゲゲン十四世のみに焦点を当てた特殊な事例であるといえなくもない。そのために、こられる事例だけから多民族・多宗教状況にある新疆における少数派であるチベット仏教の存在とホボクサイル・モンゴルの関係のすべてを理解できるわけではない。しかし、シャリワン・ゲゲン十四世とモンゴル信者との密接な依存関係は新疆において少数派であるチベット仏教が存続する要因を探る上での重要なヒントを与えてくれている。

最後に、本稿ではとりあげることができなかった今後の研究課題を整理しておきたい。一つは、寺院の行事と寺院における一般のラマ（僧侶）の言動に関する考察である。ホボクサイルの仏教は活仏・寺院・信者といった3つの要素から構成される。それ故、寺院の役割と信者との関係を明らかにすることは必要不可欠であろう。二つ目は、人々の日常生活に関するより詳細な調査である。仏教がホボクサイル・モンゴルの生活に深く浸透し、人々の行動を律する規範となっている実態を明らかにしてこそ、シャリワン・ゲゲン十四世との関係がその中に位置づけられる。三つ目は、シャリワン・ゲゲン十四世の他の訓話に関する調査である。彼のホボクサイル・モンゴル社会との関連は本稿で取り上げ

られた範囲だけではないため、ゲゲンのその他の訓話にも注目する必要がある。四つ目は、ホボクサイルのモンゴルとカザフとの関係についてゲゲンのオワー祭りに置けるシャリワン・ゲゲン十四世の訓話を分析することを通して、少し触れた。しかし、それを今後一つの課題として扱う必要がある。五つ目は、国家の宗教政策や他の宗教の信者たちの仏教に対する態度、対応である。このような五つの課題に歴史人類学や宗教人類学的な側面からアプローチすることによって、多民族・多宗教地域における民族間、宗教間関係を解明、多文化状況に置ける多様な集団の共生の諸問題といったより一般的な大きな問題の解明に寄与することになるだろう。

注

- 1) 「四オイラド」とは、ホシユド部、トルグド部、ドルベド部とジュンガル部など四つの部族の総称である。オイラド系部族は昔からほかのモンゴル系部族と異なってきた。16世紀末期から17世紀初期にかけてオイラド系部族は東モンゴル系部族であるトゥメト部、オールドス部、ハルハ部からの侵攻を受けていた。それに対してオイラド系四部族は軍事的な連合を形成し、東モンゴル系部族に対抗し、ついに勝利を挙げた。このオイラド系四部族が設立した連合を「四オイラド」連合という。
- 2) 「四オイラド」連合は1620-30年代にトルグド部とホシユド部の多くが、その部族長らに率いられてそれぞれロシアのイジル河畔と青海へ移住することによって崩壊する。「四オイラド」故地に残ったジュンガル部とドルベド部はジュンガル部長であるバートル・ホン・タイジの指導の下にジュンガル帝国を建国した。宮脇(1995)は、このジュンガル帝国を「最後の遊牧帝国」と述べている。
- 3) 当時ホボクサイル盟の下に三つのホシユ(旗)を設立し、この三ホシユ(旗)のもとに十四のソム(佐)を設立した。三つのホシユ(旗)とは、六ソム・ホシユ、ワンギン・ホシユとジャサクギン・ホシユである。六ソム・ホシユのもとには大右翼、小右翼、大左翼、小左翼、ホシユドとシビヌルという六つのソム(佐)がある。ワンギン・ホシユのもとには大右翼、小右翼、大左翼と小左翼という四つのソム(佐)がある。ジャサクギン・ホシユのもとにはブルス、ジャラキン、マーニンキンとゲキレーキンという四つのソム(佐)がある。
- 4) パンチェン・ラマ十世が円寂された後、転生のパンチェン・ラマ十一世を選出する際ダライ・ラマが指名した霊童が中国政府からの干渉で候補者に入らなかったため、チベットの人々は反発して、パンチェン・ラマ十一世を信仰していない。なお、「円寂」とは高僧が他界することを意味する。
- 5) 青海省オイラド・モンゴル出身の活仏、塔爾寺寺主で1998年に中国からアメリカへ亡命した。
- 6) ナウルズ(納吾熱孜)節はモンゴルの正月に相当する、カザフ人の正月である。一般に旧暦の3月21日に行われる。
- 7) エイド祭をオラズ・アイト(肉孜節)と呼ぶ。毎年イスラム教歴の9月に行われる。
- 8) クルバン祭をクルバン・アイト(古爾邦節)と呼ぶ。エイド祭は終わってから70日後に行われる。
- 9) 双語教育とは1980年代から中国全土の少数民族地区で実施した一つの教育制度である。例えば、現在のホボクサイルでは、小学校一年生から、母語(モンゴル語)のみの授業をモンゴル語で受け、ほかの授業(数学・歴史・地理など)を中国語で受けている。こういう教育制度を双語教育と言う。
- 10) マイドル(maidur)とは、モンゴルが正月十五日に寺院へ行って、マイドル仏に巡礼する日である。ホボクサイルや新疆におけるモンゴルたちは、この日、昼に寺院へ行ってマイドル仏に参拝し、夜に皆で集まってお祝いする、祝日となっている。
- 11) 祖魯(ツウラ)とは、新疆におけるモンゴルが旧暦十月二十五日に行う節である。この日はチベット仏教ゲルクの創立者であるツォンカバ・ロブサンタクバ(tson kha pa blo bzang grags pa)仏の円寂した日である。この日の夜、寺院では一千の祖魯を灯し、皆で祖魯に参拝する。最近では皆で集まってお祝いする、祝日となっている。
- 12) 「オボーないしはオボ——という表記は、日本における研究によく使われているが、本文ではオイラド方言に従って、オワー(ovaa)を用いる。
- 13) 田山(1954: 126-128)では、清朝に服属以前におけるモンゴルやオイラド地域の官職名の中に、ジャング(janxi)とクンド(kündü)という官職が見られる。まず、ジャング(章京)に関

してみると、当時、管旗章京、梅倫章京、札蘭章京と蘇木章京という四種類のジャングがあった。そのうち、今日のホボクサイルにおけるジャングに当たるのは蘇木章京であり、当時、ソムに関するさまざまな事務をしていた。例えば、治安の維持、司法事項の解決、アルバの徴収、旗民服役の割当て、兵員の編成、軍の指揮、三年一次の戸籍調査、上級機関よりの命令の実施、伝達等を司っていた。クンド（昆都）は、ソム章京を補佐し、主な職務は軍事及び警察に関する事項で、兵丁の召集、犯人の検挙・護送等に当たっていた。クンドはいわば最下級の役人で、定員はソムに一名、任免手続き及び任期等は、ソム章京と同じである。今日では、ジャング(jansi)とクンド(kündü)の主な仕事は、毎年一回行われるオワーの祭祀を担当することだけにとどまっている。

- 14) 国境警備隊はホボクサイル西北部の阿吾齊にある「中国边防大队」のことを示す。
- 15) シャリワン・ゲゲン十四世が、ワンギン・ホシュー（旗）のヤンジウ祭りで行った演説に基づいた。
- 16) キミル(kimir)とは、ホボクサイル・モンゴルの飲み物の一つである。モンゴル・ミルクティは、水の中に塩と茶葉を入れ、沸いたあとミルクを入れてつくる。他方、キムルは水に茶葉を入れずに少量の塩を入れ、沸いたあとミルクを入れて、つくる。これを飲むのは、日常生活において塩と茶の飲む量を制限するためである。
- 17) ハダグ(hadaγ)とは、モンゴル人が祝賀や尊敬のしるしとして人々やゲゲンまたラマに贈る、白・黄・藍などの帯状の絹布である。
- 18) 羊のウーツェ(背)とトルガイ(頭)はホボクサイル・モンゴルが最も大事な客人に用意する食物である。
- 19) Köbci-yin öndür
Köbci-yin öndür uulu-du/Köküg shobun dungudna/
Köörkü melemger bogd-daan/Mörgükü-yin irügel boltugai
Altan am tai bishigüür-i/Asxan-a hurul-du tatana/Aburul yektei bogd-daan/Mörgükü-yin irügel boltugai
Möngün am tai bishigüür-i/Mönkü-ün hurul-du tatana/Mönkü melemger bogd-daan/Mörgükü-yin irügel boltugai.
- 20) ホボクサイルにおける一般の家では上座にパンチェン・ラマとシャリワン・ゲゲンの仏像を置いてある。

参考文献

日本語文献

- 青木 保
1984 『儀礼の象徴性』岩波書店。
- アルプタン・ダゴラ
2010 「内モンゴルにおけるモンゴル族の伝統的オボー祭祀の研究：ウラーンチャヴ地方の旗・オボー祭祀の復活と変容」『人間文化研究科年報』26: 53-66。
2012 「祭祀オボーと標オボー」『人間文化研究科年報』27: 39-51。
- ダライ・ラマ14世テンジン・ギャツォ
2000 『ダライ・ラマ智慧と慈悲』マリア・リンチェン訳、春秋社。
- 古田紹欽編
1977 『仏教の社会的機能に関する基礎的研究：日本仏教を中心として』創文社。
- 後藤富男
1956 「モンゴル族に於けるオボの崇拜：その文化に於ける諸機能」『季刊民族学研究』20(1・2): 47-71。
- 橋本光寶
1942 『蒙古の喇嘛教』仏教公論社。
- N.ハタンバートル・YO.ナイガル
2012 『エルデネ・ゾー史』清水奈都紀訳、京都。
- 広池真一
2004 「活仏転世の政治学：改革開放期中国共産党の宗教政策」『中国研究月報』58(8): 1-10。
- 石濱裕美子
1999 「チベット、モンゴル、満洲の政治の場で共有された「仏教政治」思想について」『早稲田大学教育学部学術研究 地理学・歴史学・社会科学編』48: 25-40。
2009 「ダライ・ラマ四世の半世紀」『軍縮問題資料』334: 22-31。
2011 「チベット仏教世界の一部としてのモンゴル理解の必要性について」早稲田大学モンゴル研究所編『モンゴル史研究：現状と展望』218-236頁、明石書店。
- 嘉木楊凱朝
2004 『モンゴル仏教の研究』法蔵館。
- 片岡一忠
1991 『清朝新疆統治研究』雄山閣。
- 川口幸大・瀬川昌久編
2013 『現代中国の宗教：信仰と社会をめぐる民族誌』昭和堂。

- 小長谷有紀（国立民族学博物館編集）
 2004 『遊牧民のくらし』千里文化財団。
 2005 『モンゴル 世界の食文化3』農山漁村文化協会。
- 小長谷有紀他
 2007 『中国辺境地域の50年—黒河流域のめぐりとから見た現代史』東方書店。
- 小長谷有紀・斯琴編
 2013 『モンゴル口頭伝承の一資料—モンゴル国ホフト県トルグードのノースタイ氏の語り』国立民族学博物館調査報告(114)。
- 摩尼和夫
 2002 「カスピ海沿岸のカルムイク共和国における教育と信仰」『日本仏教教育学研究』10: 128-133。
- 宮脇淳子
 1991 「トルグート部の発展：17-18世紀中央ユーラシアの遊牧王権」『アジア・アフリカ言語文化研究』42: 71-104。
 1995 『最後の遊牧帝国：ジュンガル部の興亡』講談社。
- 野田 仁
 2005 「露清の狭間のカザフ・ハーン国スルタンと清朝の関係を中心に」『東洋学報』87(2): 260-230。
 2006 「清朝によるカザフへの爵位授与—グバイドゥッラの汗爵辞退の事例（1824年）を中心に」『内陸アジア史研究』21: 33-55。
 2007 「一八世紀中央アジアにおける露清関係：ジュンガル政権崩壊からカザフ、アルタイ諸族の帰属問題へ」『史学雑誌』116(9): 1457-1493。
- 岡田英弘訳注
 2004 『蒙古源流』刀水書房。
- 大野泰博
 1977 『「救い」の構造』耕土社。
- 王柯
 1995 『東トルキスタン共和国研究：中国のイスラムと民族問題』東京大学出版会。
- 佐々木史郎
 1995 「「少数民族」の重層性」『民博通信』70: 28-43。
- 佐藤 長
 1957 「内陸アジアと清朝」田村実造・羽田明監修『アジア史講座』（巻6）103-126頁、岩崎書店。
- 新免 康・梅村坦編著
 2011 『中央ユーラシアの文化と社会』中央大学出版部。
- 菅沼 晃
 2004 『モンゴル仏教紀行』春秋社。
- 田山 茂
 1954 『清代に於ける蒙古の社会制度』文京書店。
- テリー・クリフィード
 1993 『チベットの精神医学—チベット仏教医学の概観』中川和也訳、春秋社。
- 宇山智彦
 2010 『中央アジアを知るための60章「第二版」』明石書店。
 2008 『講座 スラブ・ユーラシア学 地域認識論—多民族空間の構造と表象』講談社。
- 若林敬子・聶海松編
 2012 『中国人口問題の年譜と統計：1949-2012年』御茶の水書房。
- 山口瑞鳳
 1988 『チベット（上）』東京大学出版会。
- 矢崎正見
 1961 「チベット仏教の一特色—活仏思想を中心として—」『大崎学報』(113・114): 65-75。

中国語文献

- 阿嘉・洛桑圖旦
 2013 『逆風順水』大塊文化。
- 郭・道布清、图门巴雅尔編
 2005 『蒙古族伝統医療』辽宁民族出版社。
- 弘学主編
 1997 『藏傳佛教』四川人民出版社。
- 金海他
 2009 『清代蒙古志』内蒙古人民出版社。
- 羅広武編
 2001 『新中国宗教工作大事概観（1949-1999）』華文出版社。
- 蒲文成主編
 1990 『甘青蔵仏教寺院』青海人民出版社。
- 蘇北海
 1989 『哈薩克族文化史』新疆大学出版社。
- 新疆社会科学院民族研究所編
 1980 『新疆簡史』（第一冊）新疆人民出版社。
- 新疆自治区人口普查辦公室編
 2005 『世紀之交の中国人口—新疆卷』中国統計出版社。

王輔仁・陳慶英

1985 『蒙藏民族關係史略』中国社会科学出版社。

《和布克賽爾蒙古自治州概況》修訂本編写組編写

2009 『和布克賽爾蒙古自治州概況』民族出版社。

楊貴明・馬吉祥編訳

1992 『藏傳佛教高僧傳略』青海人民出版社。

周潤年・劉洪記編

1998 『中国藏族寺院教育』甘肅教育出版社。

モンゴル語文献

ウ・エルデニ

2004 『洲を渡り東帰したトルグド』新疆人民出版社。

セ・ウルブジル

2011 「十三世のシャリワン・ジャミヤントブドンジャムソ・ゲゲンの貢献」ウ・エルデニ、バ・バトバヤル編『ホボクサイル・モンゴル人の歴史文化における研究』148-158頁、新疆人民出版社。

タ・ナムジル

2011 『オイラド・モンゴルの民俗文化—宗教編』新疆人民出版社。

トルグート・エルデニ

1995 『トルグート・モンゴル—ホボクサイル地域の集団を中心に』国立民族学博物館。

薩日格仁勒・小長谷有紀

2002 『青海省モンゴル族民俗文化における資料とその解釈：ナストニー・ジル・アルホーラハ・バヤルを事例に』国立民族学博物館。

高魁武・崔锐鋒編

2007 『ホボクサイル・モンゴル自治州誌』バ・スプト、ゴ・バトジルガル、ジャ・ドルジ訳、新疆人民出版社。

メ・ゴムジャウ

2004 『八山之郷—ホボクサイル』内蒙古少年儿童出版社。

バ・バトバヤル

2011 「シャリワン・ゲゲンの転生システムの構成について」ウ・エルディ、バ・バトバヤル編『ホボクサイル・モンゴル人の歴史文化における研究』159-169頁、新疆人民出版社。

ホ・バダー、アルタンオルゴル、エルディニ注釈

1985 『オイラド歴史文献』内蒙古文化出版社。

A Secular Example of *Tulku*: Shariwan Gegen XIV in Hoboksair Society

Namujiayu

SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies),
School of Cultural and Social Studies,
Department of Regional Studies

In this paper I examine how the Hoboksair Mongolian people, who are a minority in Xinjiang Province of China, maintain their belief in Tibetan Buddhism under the multi-ethnic and multi-religious conditions. Especially, I focus on the activities and social roles of Shariwan Gegen XIV, who lives in the Hoboksair region and is one of the prominent *Tulkus* of Tibetan Buddhism.

The Hoboksair Mongolians are generally surrounded by Kazakhs and Uighurs, who are mostly Muslims. Under such conditions, Shariwan Gegen XIV still exercises a certain degree of influence and authority over the Hoboksair Mongolians and other Buddhists in both China and Russia. By analyzing personal activities, secular moral teachings, and his presence in the Xinjiang province, it mainly reveals scenarios regarding to the religious life, worldview of the Hoboksair Mongolians, and some essential workings of the religion policy of Chinese government. Moreover, it demonstrates an important linkage to a current world-scale problem: the existence of a minority religion in a multi-religious region.

Key words: Hoboksair Mongolian, Shariwan Gegen, Tulku